



行事案内

昭和59年度企画展

- 新収蔵品展
5月15日(火)～5月27日(日)
 - 玉城朝薫生誕300年祭展
6月30日(土)～7月22日(日)
 - 沖縄のシダ植物・昆虫・貝類標本展
7月31日(火)～9月2日(日)
 - 今帰仁グスク展
10月16日(火)～10月28日(日)
 - 紅型と型紙展
60年2月26日(火)～3月10日(日)
- 第8回移動博物館
石垣市 11月1日(木)～4日(日)

博物館にヤンバルクイナがやってきた

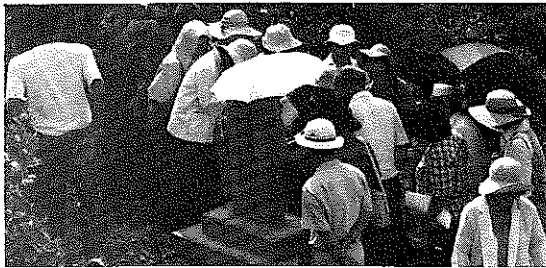
1981年、沖縄島北部(ヤンバル)の山中で新種の鳥が発見されました。大型動物としては、西表島におけるイリオモテヤマネコの発見に続くものです。この新種は、生息地に因んでヤンバルクイナと名付けられました(学名は *Rallus okinawae* [ラルスオキナワエ])。古いタイプの飛べない鳥で近縁の種類は、フィリピン・ニューギニア・セレベス島などに分布しており、沖縄島の1万8千年前の港川遺跡で類似の化石が発見されています。

1983年7月29日に東村で、30日に国頭村でヤンバルクイナが相次いで交通事故にあって死亡しました。土地の方々から教育庁文化課へ届けられた死体は、剥製標本にして永久に保存することになりました。そして、この剥製は、展示と保管のため、当館に寄託されました。自然展示室には国内では唯一のヤンバルクイナの本剥製標本が展示されております。剥製ですが、いまにも走り出しそうで、子どもたちに人気があります。

国指定天然記念物

博物館文化講座の装いをあらたに

館長 大城立裕



宮古の史跡めぐり

博物館文化講座が大きな業績をつんできました。昭和49年に第1回講座を開催して以来、116回をかさねてきました。はじめた当時は、沖縄に会場としてのホールらしいホールもなく、いわば博物館が文化的啓蒙の前衛としての役目をはたさなくてはなりませんでした。

文化講座の実績をいまふりかえてみますと、自然から人文、沖縄から世界にいたるまで、それこそミニ百科事典の観があります。まったくの薄謝でご協力いただいた講師の先生がたと、その企画、交渉運営に努力した担当職員に、ここであらためて感謝の意を表します。

さて、時代は移ってきました。那覇市内だけでなく、全県下に文化ホールがたくさん生まれました。また、大学でもその教室を一般市民に開くようになりました。その結果、文化講座の競合という現象が生まれました。たいへん結構なことと思われる反面、同じ時間帯にかちあうことも珍しくなく、受講者としても選択に困ることになります。せっかく珠玉の講座に受講者がすくなくすぎるといふ勿体ないことも起こります。このさい博物館としては、あらためて個性的なスタイルを考えてみてはどうかということになったわけです。講演、講義式のスタイルは他の講座におまかせして、博物館でなければできないようなスタイルを企画してみました。

博物館というところは、ご承知のように、文化財を蓄積しています。まったく具体的な物を見せることによって、文化を知らしめる施設です。沖縄県立博物館が創立されてから39年、その間に収集された文化財が2万点ちかくになりますが、そのうち常設展示に供されるのは7パーセントにすぎません。また展示されるものでも、その解説になると、限られたスペースにおさめる関係から、書くほうでも意を

つくしませんし、読むほうでも物たりないことと思います。そこで、収蔵品のうちから魅力的なものを選んで、解説をする会をもってはどうだろうかということになりました。

解説だけでなく、陶器、拓本、民具などをつくる教室も面白いと思います。手で文化を知ろうということです。従来は、夏休みを利用して標本を鑑定したり昆虫を採集したり、おもに小学生を中心にして実施してよるこばれましたが、これはこんどの企画を先取りしていたようなもので、そのままつづけたらいいと思います。

史跡めぐりも従来通りですが、あらためて石碑めぐりを企画しました。口頃なんとなく見すごしている、あるいは気になりながらも意味のわからない石碑を、専門家に解説してもらいます。

昭和59年4月28日、装いあらたな収蔵品解説会の第1回は、逸品とされる「江戸与那」など県指定文化財の三味線をテーマにして、講師は又吉真三先生におねがいます。後続のテーマについては発表していませんが、腹案を持っているほかに、皆さんからご希望をあつめて、できるだけ魅力ゆたかな講座にしていきたいものだと考えています。

いわば、県民の皆さんといっしょに育てていくダイナミックな文化講座にしたいと念じていますので、よろしくご期待とご協力のほどをおねがいます。

昭和59年度 博物館文化講座予定一覧

回数	月 日	テ ー マ
117	4月28日(土)	収蔵品解説会
118	6月9日(土)	収蔵品解説会
119	7月14日(土)	収蔵品解説会
120	7月28日(土)・29日(日)	昆虫教室
121	4月4日(土)・16日(木)	陶芸教室
122	8月18日(土)	拓本教室
123	8月26日(日)	標本鑑定会
124	8月26日(日)	第1回民具教室
125	9月29日(日)	収蔵品解説会
126	10月21日(日)	史跡めぐり(北部)
127	11月18日(日)	石碑めぐり
128	11月25日(日)	第2回民具教室
129	12月8日(日)	収蔵品解説会
130	60年3月2日(土)	収蔵品解説会

資料紹介

美術工芸

黒漆草木人物螺鈿椀



琉球漆器のなかでも螺鈿の技法は、沖縄の近海から螺鈿に必要な夜光貝や鮑貝が豊富に取れることから大いに発展し、その種類も多岐にわたっています。琉球の螺鈿は貝を薄くはぎ、これを文様に切り取って糊漆、膠、漆などで漆面に貼り、上から漆を塗って研ぎ出す薄貝法が主で、一般に青貝とも呼ばれています。

本品は高台付の小ぶりの挽物椀です。下地は泥下地で、総黒塗りの研ぎ出しによって文様を表わしています。内側と内底部に錫を貼り、口辺と高台縁ではわずかに外側まで覆い、下地に溝を作りくい込ませてあります。このくい込み部分の溝には金箔が押し込まれています。上部は二重の山形文で、山形の間には三葉の文様が交互に配置されています。腰部は菱形文でともに界線状に器をリズムカルに巻いています。月夜の庭園で遊ぶ三人の人物が描かれている図柄は、すべて薄貝をもちいた研ぎ出しによるものです。岩などは大片の切貝で表わし土坡は小片の薄貝で表現されています。また、人物の顔や服のしわなどは細線を用いて毛彫で施しています。本品は多少粗略なところがみられ、類似品もあることから恐らく18～19世紀頃のものだと推測されます。

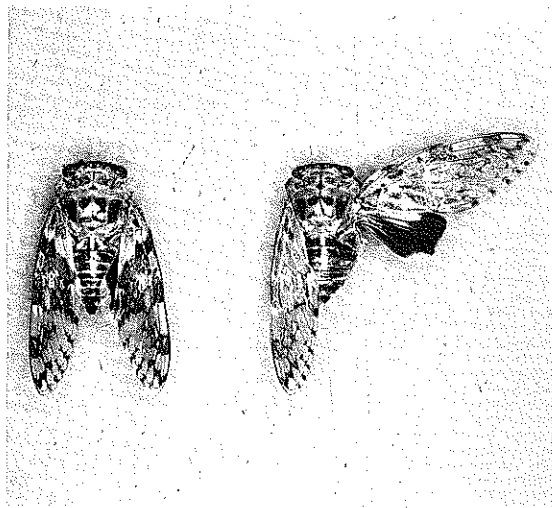
琉球漆器の歴史のなかで螺鈿は17～18世紀にかけて主流をなし、その繊細な技法は琉球漆器のすばらしさを内外に示しました。しかし量産されはじめる18世紀頃からは文様が簡略化され形式的になっていきます。

資料紹介

自然

珍種、イシガキニイニイ

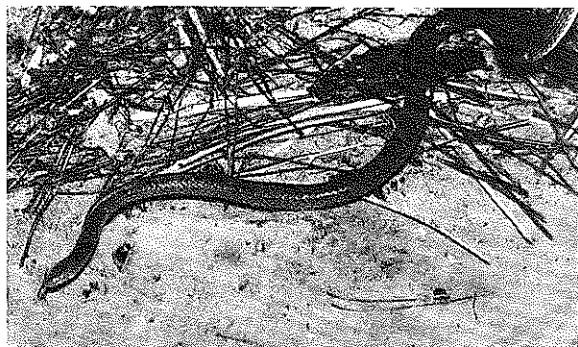
このたび、八重山農林高校教諭島村賢正氏より6・7月に採集された八重山産のセミ類5種24点が当館に寄贈されました。この中には珍種のイシガキニイニイが5点も含まれています。この種類は、1971年に初めて採集され、1974年にはこれまで全く知られていなかった新しい種類として公表されました。分布は、石垣島だけにしか生息していません。更に、石垣島でも一地域の限られた所にしかいないのです。他に、八重山諸島にはヤエヤマニイニイが広範囲に生息しています。おそらく、生息地が限られていること、及びヤエヤマニイニイに紛れていたこと等により発見が遅れたものと思われます。生活の内容は調査が遅れていることもあって、あまりわかっていません。最近相次いで発見されたヤンバルクイナやヤンバルテナゴコガネなどは大きく脚光を浴び一般にもよく知られていますが、このイシガキニイニイのようにあまり知られてないものもあるのです。新



種の発見は程度の差はあるが、以前から続いています。また、これからも続くことでしょう。

研究コラム

キクザトサワヘビの再分類



キクザトサワヘビは、1956年喜久里教達氏によって久米島で初めて採集されました。この標本を研究した高良鉄夫博士は、これまで知られていないアオヘビ属の新しい種としてみなし、研究の成果を岡田弥一郎博士と共著で1958年に発表しました。学名は、採集者の喜久里教達氏に捧げられて *Liopeltis kikuzatoi* [リオペルティス キクザトイ] とつけられ、和名は、アオヘビ属の仲間としてキクザトアオヘビと名付けられました。その後の採集例は無く、ただ一頭体だけしか知られていなかったので幻のヘビともいわれていました。1981年、二番目の標本が喜久里教達氏から当館に寄贈されたのをきっかけに、私は、本種に秘められた未解決の問題を解くため、改めて調査をすることにしました。幸いにも、喜久里氏の御教示により三番目の標本を久米島で調査中に採集することができました(写真参照)。私がこれらの標本に基き分類学的な検討をしたところ、日本に分布しない別属の *Opisthotropis* 属に属する種ということがわかりました(Toyama, 1983: Jpn. J. Herp., 10(2) 33-38p.)。この再検討によって、分布だけでなく、分類・生態学的にも大変珍しいヘビが久米島に実在することが明らかになったのです。また、従来のキクザトアオヘビとされていた和名を本種の生態的な特徴に困んでキクザトサワヘビと改称しました。次に、これまでの研究によって明らかになったところを紹介します。

学名: *Opisthotropis kikuzatoi* (Okada et Takara, 1958)

[オピストトロピス キクザトイ]

和名: キクザトサワヘビ (異名: キクザトアオヘビ)

分布: 久米島

生態: 山地の自然林に囲まれた溪流を生活の場所としている。

標本保管場所: 琉球大学農学部(1個体: 模式標本)、沖縄県立博物館(2個体)

キクザトサワヘビの特徴: 全長60cmに達する。鼻孔は上方に開孔する。前額板は一枚。胴部の鱗は非常に滑らか。尾部の鱗は顕著なキールが走っている。久米島の山地の自然林に囲まれた溪流を生活の場としており、陸に上がることもあるが、水中に潜ることが多いようである。生活の内容は全く知られていない。オタマジャクシや水棲昆虫などを食べていることが予想される。

なぜ珍しいのか: 同属の仲間は、中国から東南アジア、スマトラ、ボルネオ、フィリピンに分布する。ヘビ類としては珍しく、高山の溪流に生息していることが知られているが、発見例も少ないこともあって研究が遅れている。このような謎に包まれたヘビのグループの一員ではあるが、本種自体もまた多くの謎を秘めている。国内では、この様な山地の溪流をすみ場所としているヘビ類は他に例がない。久米島の近くであって、それより大きい沖縄島には生息が確認されていない。宮古・八重山・台湾でもみつからない。本種に近い種類は、中国大陸の山岳地帯でしかみられないのである。かって中国大陸と久米島とが陸続きだったことを裏付ける生き証人といえよう。大きな陸塊でしか見られないようなヘビのグループの一員が、世界地図にも載らないような小さい島だけに分布するのは驚異的であり、生き物の奥深さを改めて教えてくれる。

生息地の現状: 久米島全域の河川の様子を注意して調査した(当山, 1984: 沖縄県立博物館紀要第10号)が、本種が生息している可能性のある川は白瀬川以外には無いように見える。また、白瀬川でも生息地として適していると思われる場所は、全長1kmにも満たない一支流しかないことがわかった。もし、それだけのすみ場所しかありえなければ個体数も極くわずかであろう。この様な条件下で種族を維持していたとするならば、それは奇跡に近いことではあるが、絶滅の可能性が極めて高いことをも意味するものである。早急に適切な保護措置が望まれる。

(学芸員 当山昌直)

半年をふりかえって

小野 まさ子 (教育普及補助員)



私の仕事の正式名称は教育普及補助員です。博物館に入って左手の一角、案内コーナーと称するところにおります。この一角よりみた博物館の様子を書いてみたいと思います。

ところで、近頃の旅には二つの大きな傾向があるよ

うに思われます。一つは団体旅行の充実です。もちろん、物質面の充実もありましようが、ここでは知的充実のお話です。団体旅行に知的充実を求めることです。例えば、「伝統工芸の旅」「歴史の旅」「民芸の旅」などです。バスに、説明及び解説者がついてる旅もよくみかけます。正しい沖縄を知って満足して帰っていただければとてもよいことではないかと思ひます。

又、もう一つの傾向としては、個々で旅にも個性をもたせているようだということです。そして、自分独自の「歴史」「民芸」「伝統工芸」をみつけるために、この博物館にこられるようです。ですから、とても時間をかけて下さいますし、住んでいる私達とは違った色々な質問に出会います。例えば、墓の立地のことなどです。しかし、ここには多少問題が残ります。正しい沖縄を教わって帰るはずの旅が時として説明者の勘違いにより、少し違う沖縄を確認して帰られる方がいらっしやることです。例えば、このコーナーから見通せる首里城正殿の模型などのことです。これは百分の一でも千分の一でもありません。三百メートルや三キロの建物なんて大きすぎると思いませんか。この模型は十分の一でしかないのです。経済面での観光問題はよく出るのですが、もっと文化面での観光、特に説明される方の正しい知識が必要ではないでしょうか。もし、疑問点などがありましたら、案内コーナーへどんどん問いあわせ下さい。できるだけ、お答えしていきたいと思ひています。このような面で観光と博物館が結びつくことができれば、よい観光をしてもらえるのではないのでしょうか。

今は、観光客についての提言でしたが、今度は県内の見学者について述べてみたいと思ひます。県内でも家族づれよりは団体が多いようです。小学校の遠足、老人クラブ、会社などです。「博物館なら行っ

たことがあるよ。」とおっしゃる方は多いのではないのでしょうか。特に小学生の遠足は、小学一年生から六年生まで、たいへん多いようです。でも、本当に博物館の中で、何か自分のものを得て帰る学校や子供は何人ぐらいいるのでしょうか。「確かに博物館にはいった。ちゃんとスタンプも押してきたよ。だけど、何をみてきたかなあ。何をみればよかったのかなあ。」では困ると思ひませんか。たとえば、沖縄の島のでき方、又は自分のまわりにいる動物、昔使っていた道具など、一点でもいいですから、じっくりみて帰ってほしいのです。又は、低学年は博物館を見る時の態度を勉強してもらってもいいのです。まるで、運動場と間違えているのではないかなあと思うこともあります。博物館の中では走らない、大きな声でおしゃべりをしない、教室の中で勉強をする時と一緒の簡単なことではないでしょうか。以上の様に何か目的を持ってこられる学校には、当日はおつきあいできませんが、事前の資料づくりなどお手伝いさせていただきますと思ひていますので、どんどん御連絡下さい。

先程、県内でも個人より団体が、つまり、家族づれよりは遠足などが多くを書きました。本当にそんなのです。博物館のイメージは、そんなに固いのでしょうか。家族で知らなかったことを確かめたり、又は子供に伝えたい昔のことを実物をみながら話す場所として最適な所ではないかと思うのです。遠足の子は、みんなスタンプに群らがります。そんなときに、「今度家族できたときに押したらいいんじゃないの。」という間に「家でなんか来ないよ。」ではなくて「はい。」と答えてくれる子供達の環境をつくってもらえないでしょうか。

収藏品解説会について

当館では博物館文化講座を装いあらたな収藏品解説会として、昭和59年度からスタートすることになりました。これは当館が所蔵しているものから選定して詳しい解説を行うものです。この企画に多くの県民のご意見を反映したいと考えておりますので、解説ご希望の収藏品（現在展示中のものから選定してもよい）がありましたらご意見をお寄せ下さい。

(TEL. 0988-84-2243)

◆博物館資料寄贈者名簿 (敬称略)

(昭和58年12月～昭和59年3月)

数多くの方々から、たくさんの資料を寄贈していただきました。博物館資料として大切に保存、活用させていただきます。今後とも当館の充実のために御協力下さいますようお願い申し上げます。

【自然】

- 近畿地学会 (姫路市) 岩石38点、他48点
- 島村 賢正 (石垣市) 八重山産セミ類24点
- 岩附 信紀 (那覇市) 沖縄産昆虫13点
- 上杉 兼司 (中城村) オオゴマダラの黒化型
- 渡辺 賢一 (石垣市) チャイロマルバネクワガタ
- 金城 政勝 (那覇市) 沖縄島産のチョウとセミ14点
- 東 清二 (那覇市) 沖縄産昆虫標本13点
- 佐藤 文保 (那覇市) 昆虫類標本 1,727点
- 比嘉 正一 (浦添市) 沖縄産チョウ類 245点
- 新城 安哲 (那覇市) 沖縄産昆虫66点
- 本盛 之規 (竹富町) リュウキュウイノシシ
- 比嘉 弘勇 (豊見城村) アカショウビン
- 幸喜 俊治 (那覇市) シジュウカラ
- 仲宗根一雄 (具志川村) タゲリ
- 糸数 和夫 (具志川村) ホウロクシギ
- 伊計 光義 (具志川市) ズアカアオバト

【美術工芸】

- 吉戸 直 (那覇市) 染織品36点

【民俗】

- 宮城 篤正 (浦添市) 頭上運搬用の輪
- 糸数鍛冶屋 (石垣市) ピラ
- 宝 花園 (石垣市) しめ縄
- 崎間 敏勝 (浦添市) サロン
- ルイズ・コート (U. S. A.) ムング族の「布の花」
- 中村 隆志 (那覇市) 南米ペルーインディオの木笛
他1点
- 土田 操 (大阪府) 石厨子4点
- 翁長 正昭 (豊見城村) 厨子甕9点
- 伊波 公宜 (大阪府) 厨子甕12点
- 仲本 政裕 (那覇市) 厨子甕12点



58年度の刊行物案内

- 1 「新収蔵品展」
新収蔵品を紹介する図録
- 2 企画展「琉球の漆工芸」
企画展の資料を紹介した図録
- 3 館蔵品シリーズ3 紅型
博物館資料を紹介した図録
- 4 沖縄県の土器 (目録)
県内土器調査の成果をまとめた目録
- 5 博物館だより16号
博物館活動の近況報告
- 6 博物館だより17、18号
博物館活動の近況報告
- 7 沖縄県立博物館年報 No. 16
前年度の博物館の活動状況報告
- 8 沖縄県立博物館紀要 No. 10
学芸員の調査研究報告

—— 会員をふやしましょう ——

〈沖縄県立博物館友の会〉

沖縄県立博物館友の会では会員を募集しております。会員には普通会員 (大学生を含む、年額2千円)、準会員 (小中高生に限る、年額1千円)、賛助会員 (1口1万円) の3種類があります。また会員となった場合には、次のような特典があります。

- 1 博物館の無料または割引で入館できる会員証がもらえます。
- 2 友の会だよりの「赤い瓦」が配布されます。
- 3 県立博物館の諸行事の通知がなされ、参加が優先されます。
- 4 出版物が割引で入手できます。但し、友の会発行のものは2割引、また委託販売しているものは1割引です。

「友の会」入会手続等については、下記にお問い合わせ下さい。

* 沖縄県立博物館内 友の会事務局員
池宮城啓子 電話 (0988-87-0418)

沖縄県立博物館だより No.19・20

発行年月日 昭和59年3月31日

編集・発行 沖縄県立博物館

住 所 〒903 那覇市首里大仲町1-1

TEL. 0988-86-4353
84-2243